

住井すゑとその文学の里(十五)

牛久沼のほとり

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功

内務大臣後藤新平の帝都復興

大正12年(1923年)9月1日の大震災で東京市内十五区の特徴である、お役所の麹町、書生の神田、

和製の日本橋、高襟の京橋、南東京の芝、虫声の麻布、華族の赤坂、腰弁の四谷、高台の牛込、学者の小石川、角帽の本郷、花の下谷、女の浅草、職工の本所、水郷の深川がほぼ灰燼に帰した。

大地震に誘発されて起こった火災の最中の9月2日に慌ただしく第二次山本権兵衛内閣が成立した。

山本内閣の内務大臣に就任した後藤新平は9月27日に帝都復興院を特設して、自らその総裁を兼務した。後藤は東京市長在職中、区画整理による東京市内大規模改造計画を立案して、大風呂敷の評判が立っていた。後藤は震災地の応急対策が一段落すると、政府一部にあつた遷都論を排し、欧米の最新都市計画案を採用、大規模な区画整理と、公園、幹線道路を設置する帝都復興計画案を作成した。

その案は30億円(この年の国家当初予算は15億2105万円)という巨

額の予算を要するものであつた。結局、後藤の復興計画案は、予算総額が7億円余りの大幅に縮小されたものになつた。

犬田卯の農民文芸研究会

阿佐ヶ谷への移住

この年の5月に犬田家では長男章が誕生し、10月に住井は病氣治療のため牛久より上京してきた小川芋銭と初対面した。

大震災で東京市内の大半が焼けると、東京市内に居住していた人々の郊外への移住が始まり、新たに新宿、渋谷が副都心になつた。

犬田・住井夫妻が住む北豊島郡瀧野川村田端の文芸芸術村およびその周辺へも東京市内から人々の移住が始まつた。住宅、商店、それに続いて工場も建ち始めた。

卯は工場の煙突と、貨車操車場に入入りする蒸気機関車とが吐き出す煙で咳き込むことが多くなつた。

関東大震災の前年の大正11年12月、田端文芸芸術村の一角に石川三四郎という無政府主義論者が移

り住んだ。石川は万朝報(自由民権派の黒岩涙香が発刊した日刊新聞)で、幸徳秋水、堺利彦と出会い、両者が興した平民社に存社したこともあつた。石川の友人椎名其二も卯が住む町内に移住してきた。

その椎名宅で、週2回、フランスについての自由講座が開かれ、椎名が社会主義者ブルードンを語り、石川が社会思想を論じ、早稲田大学文学部仏文科で教鞭を取る吉江喬松が文学を語つた。聴講者は帝大(東大)、早大、一高(東大教養学部の前身)などの学生で、多い時は10名を超えたが、一番熱心な受講者は卯であつた。

ところで「インターナショナル(プロレタリアート)労働者・農民」の中の社会主義者の国際的組織は、労働者を革命の前衛に位置づけ、農民層を除外していた。プロレタリア文学者(労働者の生活を階級的自覚で現実を階級的立場から描く)およびその一部運動家も都市労働運動家を革命の前衛に位置づけ、農民を除外していた。

卯は彼ら前衛芸術家が除外する「農民による文学」によつて革命(農地解放など)をという独自の境を確立しつつあつた。関東大震災で卯が主宰する農民文学研究会の活動が中断していたが、その例会が、大震災の翌年の大正13年4月から、

椎名宅で再開された。幹事役が卯で、「農民文芸研究会(後に農民文芸会)」という名が付けられた。椎名は間もなく東京市郊外の豊多摩郡杉並町大字成宗(現杉並区成宗)へ移つていった。

そこは田畑の中に家屋が点在する静かな空気の良い所なので、犬田家も翌大正14年(1925年)の5月に椎名宅の隣に移つた。4DKの借家であつた。筋向いには大逆事件(明治43年に幸徳秋水らが明治天皇の殺を企てたとされる)の官選弁護人を務めた今村力三郎が住んでいた。今村は足尾鉬毒事件などを担当し、戦後の昭和21年に専修大学総長になり母校の復興に尽力した。



農民文藝會例会(大正15年、犬田卯は後列右から二番目)